

類義語の意味と用法 The Meanings and Usages of Synonyms

荻野 隆聡

1. はじめに

英語の授業で英作文を行うと、日本語の単語とそれに対応する英単語の語義の違いが問題になることが少なくない。例えば (1) を英語にせよという場合、(2) のような英作文を行う学生がよくいる。

(1) ジョンは階段をノボッテ二階に行った。

(2) *John climbed the stairs to the second floor.

しかし、「階段」をノボル場合には、通常 'climb' は使えない。John R. Taylor (1989: 106) は、(3) の例文を挙げ、'climb' の意味特徴を (4) のように説明している。(cf. Fillmore, Charles J. (1982))

(3) The boy climbed the tree.

(4) Climb, in (8) (=3), designates a rather complex process, involving locomotion from a lower to a higher level by means of a fairly laborious manipulation of the limbs.

((8) (=3) における climb は相当複雑な動作を伴う前進を表す。かなり労力を使う手足の動きによる下から上への移動を意味する。)

階段を使っの上方移動は段差のある床（地面）を歩くことで、ごく単純な動作であるため、(4) の 'climb' の意味にはそぐわない。

けれども (5) の英作文では、(2) の英語を書く学生は比較的少ない。

(5) ジョンは階段をアガッテ二階に行った。

(5)のようにノボルではなくアガルを使った日本語を英語にする際に(2)を書く学生が少ないのは、「ノボルは climb に対応する」という図式が頭の中ででき上がっているからだと考えられる⁽¹⁾。

日本語のノボルは多義であり、他にも次の例のように使われる。

(6) 木にノボル

(7) 山にノボル

(8) 演壇にノボル (『明鏡』)⁽²⁾ —

(6)–(8) のノボルの動作は明らかに異なる。(6) は手足を巧みに使いながら、木を上方に移動していく動作である。(7) は坂道を、時には杖などを用いてかなりの労力を使って頂上へと移動する動作である。(8) は、講演者などが演壇へ移動することを表す⁽³⁾。(6) (7) の英語として、‘climb’ を使った (9) (10) は可能だが、(8) に対して (11) は不可能である。

(9) climb a tree

(10) climb a mountain

(11) *climb a platform

(6) (7) は Taylor のあげる意味特徴 (4) を満たしているため ‘climb’ を使って表現できるが、単純な動作である (8) の行為については ‘climb’ はふさわしくない。(8) は英語で (12) のように表現できるだろう。

(12) mount a platform

ノボルと ‘climb’ は意味が重なる部分もあるがそうでない部分もある。本稿では筆者が最近接した日英語の語義のずれをもとにして考察を進めていくことにする。

2. 類義表現の日英対照

2. 1 誤用について

ある時、日本語学習者が手動の鉛筆削り（機）を見て「鉛筆切り」と表現した。日本語を母語とする者にとっては考えもしない誤りであろう。日本語を母語とする者は、鉛筆を書きやすいように尖らせる行為はケズルだということは無意識的に身につけており、この行為について別の動詞を使うことはまずない。以下ではこの誤用を手がかりにして日本語と英語の動詞をいくつかあげ、その意味分析を行いその中心的意味を探っていく。

2. 2 ケズル

この語が筆者が本稿を書くきっかけになった語であるが、まず (13) から検討していこうと思う。以下、b 文は a 文に対応する表現である。

(13a) 鉛筆をケズル

(13b) sharpen a pencil

ここで例としてケズルの比較的厳密な定義がなされている『類語』をみることにしよう。

- (14) 形を整えたり、何かに使うために、刃物でものの表面をこするようにしてとる。「ナイフで鉛筆を～」 「かつお節を～」 「かんなで板を～」 「身を～ような思いでためたお金」

この定義は参考になる⁽⁴⁾。ケズルの目的は「形を整えたり、何かに使うため」であり、道具は「刃物」を用い、対象物の「表面をこするようにしてとる」のである。日本語では (15) のようにいえるだろう。

- (15) 鉛筆をケズッタけど、書けなかった。

ケズルはその行為の過程に焦点が当たっているため、(15) は言えるのだと

考えられる。鉛筆をケズル行為を行ったとしても、その鉛筆で書けないこともある。例えば子供が「カッターを使って鉛筆の表面をこするようにとった」のだが、カッターの使い方が未熟であったため芯の部分まで達せず文字を書くという目的を果たすには至らなかったというような状況が考えられる。

(15) に対応すると思われる英語 (16) はかなり不自然な文といえよう。

(16)?? I sharpened a pencil, but couldn't write with it.

これは 'sharp' がケズルのように行為の過程に焦点を当てた語ではなく、行為後の結果状態に焦点を当てた語であることに起因するものと考えられる。'sharpen' は形容詞由来の状態変化を表す動詞であり (Levin, Beth 1993: 244ff), これらの動詞は変化後の状態に焦点が当たっている達成動詞であることが多い。このため (16) は「鉛筆を筆記可能なように鋭くしたが、その鉛筆で書くことは不可能だった」という矛盾を含む不自然な文になってしまう。動詞ケズルと 'sharpen' の違いは次のように表せよう。

ケズル：行為の過程重視

sharpen：行為後の結果状態重視

2. 3 キル

キルは、日常よく使う動詞であり、その意味は比喩的、派生的用法を含めると非常に広い。例えば (17a) と (18a) は一見すると、直接的に意味の関連があるとは思えない。

(17a) 枝をキル

(17b) cut a branch

(18a) (三角コーナーの) 水をキル

(18b) drain water from a sink tidy

(17a) は、典型的には庭の木の枝が伸びすぎたので余分な部分を刃物で切断するという場面である。この場合英語学習者 (以下、単に「英語学習者」

という場合には、日本語を母語とする英語学習者を指すこととする)は間違ふことなく(17b)を思い浮かべる。(18a)は三角コーナーに溜まった生ゴミの水分を無くす行為を意味する。我々日本語を母語とする人間は、(17a)(18a)共に何の迷いもなく自然な文だと思うが、日本語学習者(以下、単に「日本語学習者」という場合には英語を母語とする日本語学習者を指すこととする)にとっては(17a)については納得できるが、なぜ(18a)でキルが使われるのか理解できないことになる。また英語学習者(特に初学者)は(18a)に対応する英語として日本語のキルにつられて“cut water”のように英訳してしまうこともあり得る。それぞれのb文で示したように英語では異なる動詞を使う。ここで問題となるのは、キルと‘cut’の意味の本質的な違いである。まずキルの意味として(19)に掲げる国広哲弥(1997: 64)が参考になる。

- (19) 切る《線状の物を一点で分離させたり、面状の物の一部を線的に分離させたり、立体を滑らかな断面ができるように分断することを指すが、手段に制約はない》

(17a)は(19)の特徴を完全に捉えた典型的用法なので問題ないだろう。(18a)では(19)に述べられている線状・面状・立体の物質は表現されていない。しかし(18a)の場面を考えてみるとなぜキルが使われているかがわかる。

三角コーナーに溜められた生ゴミは、水分を多く含んでおり、別のゴミ袋に移す際には水滴が垂れる。この水滴が出なくなるまで、水分を無くすことをキルと表現している。あたかも三角コーナーから止めどなく流れる水分を、切断するがごとく止める行為をキルで表しているのである。(18a)は国広哲弥(1985)のいう「痕跡的認知」表現の一種だと考えられる。「痕跡的認知」表現は、「そのレストランは町をハナレタ所にあった」「そのレストランは町をハズレタ所にあった」という文を例にあげて、(20)のように説明されている。

- (20) この表現法の特徴は、客観的に見れば物の動きはあり得ないのに、あたかも動いたかのようにとらえているところにある。これを「痕跡的認知」と呼ぶことにする。

あげられている2例は、双方とも主語であるレストランが自分自身でハナレル、ハズレルという行為を行ったかのように表現している。けれども(18a)の「水」は主語ではなく目的語である。この点でレストランの2例と(18a)は少し異なる。ここでは、(20)は主語が動いた結果として自動詞を用いて表現されているため、仮に「動的痕跡認知表現」、(18a)は目的語である「水」が、表現されていない主語である人間によって切断されたかのように他動詞を用いて表現されているため「非動的痕跡認知表現」と呼んでおくこととする。(18a)は非動的痕跡認知表現であり、表現されていない人間(主語)が実際に切断したわけではないが、あたかも三角コーナーから流れ出る水を鋭い刃物のようなもので切断し、これ以上流れ出ないようにしたかのように表現している。他に非動的痕跡認知表現の例として国広哲弥(2002)があげる「障子を張る」がある。

一方、英語に目を転じてみると、‘cut’は刃物を用いて切断する行為である。明らかに刃物による切断を意味する(17b)については問題はあるまい。では、(18b)ではなぜ‘drain’が使われるのであろうか。これは、日本語では三角コーナーから流れ出る水を切断するように止める行為に着目しているが、英語では同じ場面であっても、水分を排出させることを意味する動詞‘drain’を用いて、流れ出る水を出し尽くす点に着目しているためだと考えられる。

2. 4 トグ

トグは、ある物質を別の物質を使って鋭くするという意味であろうと考えられる。これだけを見ると「鉛筆をトグ」も言えそうな気がするが、この表現は不可能である。日本語学習者が誤りやすい例である。トグは例えば次のように使われる。

(21a) 包丁をトグ

(21b) grind a knife

(22a) 米をトグ

(22b) wash rice

(21a)(22a)はいえるが、トグを鉛筆に対しては用いることができない。(14)でみたように、ケズルは「形を整えたり、何かに使うために、刃物で

ものの表面をこするようにしてとる」ことであった。(21a) (22a) は「ものの表面をこするようにしてとる」には違いないが、道具として刃物を使っていないところがケズルと異なる点である。なるほど (21a) は砥石を使い、(22a) では水を媒体として米粒をこすり合わせる。刃物はいっていない。国広哲弥 (1999) はトグの意味を (23) のように記述している。(cf. 柴田武編 1976 : 105ff)

(23) とぐ《ある目的をもって物の表面に研磨剤を用いて摩擦を加え、
薄くすり減らす》

(23) では、トグ際に用いられる研磨剤については触れてはいないが、より厳密に言えば用いられる物質は、刃物以外ということになる。鉛筆の場合、先を鋭くするためには何らかの刃物を用いることが不可欠なのでトグを使うことはできない。

対応する英語はどうだろうか。LDOCE は (21b) の動詞 'grind' の意味を次のように定義している。

(24) to make smooth or sharp by rubbing on a hard surface: *A man came to grind the knives and scissors. / The lenses for giant telescopes are very expensive to grind.* (硬い物質の表面をこすって滑らかに、又は鋭くする。「1 人の男が包丁とはさみを砥ぎにやってきた」「大型望遠鏡のレンズを砥ぐには大変お金がかかる」)

(24) の定義をみると、トグと 'grind' はおおよそ同じ意味といえよう。通常日本語では、望遠鏡、メガネ等のレンズをトグとはいえない。ミガクを使うのが普通である。しかし (24) の 2 例目のように、レンズを作る (製造) する際にはトグを使うことができる。製造過程でガラスを精密に削っていき、最終的にものが最もよく見えるようにすることをトグという。一般の人々がレンズの表面をきれいにするときにはミガクといわなければならない。'grind' も同様であり、製造過程ではなくレンズの使用者がレンズをきれいにする際には 'clean', 'wipe' などを用いなければならない。

以上はトグと 'grind' の類似点だが、異なる点もある。まず、トグは対象物の表面をすり減らすことに重点が置かれているといえる。すり減らせば、

(21a)の場合すり減らされた部分が細かい粒子となって発生する。(22a)の米をトグ際には、米粒の表面に付着していた粒子状の糠が水に溶け出す。トグの場合はこれらの粒子は必ず廃棄される。けれども‘grind’の方は対象物、及び動作を行った結果発生する物質の両方に重点が置かれている。例えばコーヒー豆(対象物)を細かくすりつぶす動作は‘grind’を用いて表現するが、この場合動作後に発生した顆粒状のコーヒーを廃棄することはしない。逆にこの顆粒を作り出す目的ですりつぶすのである。(22a)は付着した糠を廃棄することが目的であるので‘grind’は使えず、水を媒体として不要物を取り除くことを意味する‘wash’を使う。この場合に‘grind’を使うと、こすってすり減らした結果生じる物質にも焦点が当たっているため、何らかの目的のために米粒をすりつぶして粉にすることを表すことになる。‘grind’の意味は次のように示すことができるだろう。

grind: 対象物に圧力を加えすり減らす。その目的は次の2つのいずれかである。

- ①すり減らされた対象物を用いるため。
- ②対象物がすり減らされた結果発生する物質を用いるため。

動作の目的が上記の②の場合にはトグは使えないといえる。

2. 5 ミガク

最後に、前項のトグと‘grind’の分析で少し触れたミガクについて考えてみたい。例として『岩波』でミガクをひいてみると(25)のように説明されている。

- (25) ①表面をこすって、光らせたり、きれいにしたりする。「玉を一」
 ②手入れをして美しくする。「肌を一」
 ③練習したり勉強したりして、上達させる。練磨する。「腕を一」

③は比喩的派生義なのでここでは扱わない。②は①から派生したものと考えられる。対象物の表面をこすれば、ごみやほこり、くすみなどが取り除かれて美しくなるわけであり、対象物が肌の場合は手入れをすることになる。このように見てくるとミガクの中心的意味は(25)の①だということ

ができる。国広哲弥(1999)もミガクは「表面につやを与え、綺麗にする」ことであると述べている。ミガクはトグとは反対に、どちらかといえばその動作よりも、つやを出し綺麗な状態にするという結果状態重視の動詞だといえる。

英語はどうだろうか。典型的な用法のみをあげてみる。

(26a) 歯をミガク

(26b) brush one's teeth

(27a) 靴をミガク

(27b) polish (shine) one's shoes

(26b) では動作を行う場合の道具であるブラシが動詞として使われている。英語では道具名詞由来の動詞を使って、その道具を用いて行う動作を表すことができる場合が多い⁽⁶⁾。'brush' はミガクとは異なり、動作重視の動詞であると考えられる。歯を歯ブラシでこすっても必ずしも清潔で綺麗になるとは限らないだろう。喫煙者の歯に付着したヤニは歯ブラシでこする動作を行ったとしても簡単には取れない。つまり結果状態は含まない動作重視の動詞である。これに対して(27b)の'polish'と'shine'はミガクと似ていて、動作後につやがでる、輝くという結果状態を含む語といえよう。両語ともに対象物に対して動作が行われれば、その結果として対象物は必ずつやがでたり、輝いたりする。

3. おわりに

本稿では日本語学習者の誤用にヒントを得て、いくつかの日英語動詞について語義の相違点、類似点の考察、分析を行った。同じ意味を表すと思われる日英語の動詞であっても、その意味範囲が微妙にずれていることを示した。このことが、学習者が英語又は日本語を学ぶ際の一助となれば幸いである。

注

- (1) ノボルは ‘climb’ に対応するという思い込みからくると同様の誤りが池上嘉彦 (1991:1ff) に報告されている。

ある年の入試の下線部英訳の問題の中にたまたま「辞書をひく」という表現が入っていた。問題を見たときから、多分これを逐語訳に直訳した答案が出てくるだろう、しかし、そういう答案にはお目にかかりたくないものだ、いずれにせよ出てくるとしてもごく少ないだろう、そうあって欲しい、などと思っていた。実際に採点を始めて驚いたことには、‘draw a dictionary’ という解答が次々に出てくる。それも十枚に一枚という程度のもではなかった。よくは覚えていないが、時には半分に近いのではないかと思える位の割合であったような印象が残っている。

他に「海水浴客」を ‘swimming customers’ と英訳した解答例も多くあったという。

- (2) 参照辞典の略号は本稿末に掲げる。
 (3) ‘climb’ は必ずしも上方への移動だけを意味するわけではない。東信行 (1981) はこのことを次のように説明している。

climb に対して ‘He climbed that tree.’ とか ‘The child climbed into the car.’ などでは「よじ登る」とか「はい登る」が相当すると言えるが、‘I opened the window and he climbed through.’ ‘The child climbed out of the car.’ ‘We easily climbed down the mountain.’ ‘Cats often find it easier to climb up a tree than to climb down (it).’ などの例に見るように climb は方向が上方に限定されていない。ただし上向きでは climb up と必ずしも up を付加しなくてもよいが、下向きでは down を付すのが通例である。 —

- (4) 厳密に言えば、(14) の「ナイフで鉛筆を～」 「かつお節を～」ではその目的が異なる。「ナイフで鉛筆を～」はケズルという行為が及んだ物質自体を利用するのであり、「かつお節をケズル」はケズル行為が及んだ物質ではなく、ケズル行為を行った際に生じる物質を利用する。ここで鉛筆とかつお節の機能について考えると、鉛筆は芯が鋭く尖っていてはじめて鉛筆の機能を果たすのであり、かつお節の例ではかつお節自体を食べるのではなく、ケズル行為を行った際に生じる物質である「けずり節」を食べるので

ある。

なお、元来、乾燥させた棒状のものを「かつお節」、料理にふりかける状態になったものを「けずり節」というが、実際の用法では「けずり節」のことを「かつお節」と呼ぶこともあるようである。店で売られているものは、棒状のものには「かつお節」、ふりかける状態になったものには「かつお節(けずり節)」と明記されていることが多いようである。

- (5) ミガクにあたる英語としては他に 'scour' があるが、これはその用法が非常に限定されているため、ここでは扱わない。ちなみに *Activator* では 'to rub a cooking pan or hard surface with a piece of rough material in order to clean it' と定義されており、主に焦げついた鍋について用いられる語である。また、'scrub' も場合によってはミガクにあたることもあるが、光沢をだすというよりは擦り合わせるものが基本義である。
- (6) 道具名詞由来の動詞については Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) に詳しい。彼らは道具名詞由来の動詞に対して 'Instrument Verbs' という用語を使っている。

参考文献

- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark (1979) When nouns surface as verbs. *Language* 55: 767-811.
- Fillmore, Charles J. (1982) Towards a descriptive framework for spatial deixis. In R. J. Jarvella and W. Klein (eds.), *Speech, Place, and Action: Studies in Deixis and Related Topics*. 31-59. Chichester: John Wiley.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: Chicago University Press.
- Taylor, John R. (1989) *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- 池上嘉彦 (1991) 『<英文法>を考える <文法>と<コミュニケーション>の間』, ちくまライブラリー。
- 国広哲弥 (1985) 「認知と言語表現」, 『言語研究』第 88 号, 1-19, 日本言語学会。
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』, 大修館書店。
- 国広哲弥 (1999) 「日本語動詞の多義体系 (3)」, 『神奈川大学言語研究』第 22 号, 1-12, 神奈川大学言語研究センター。
- 国広哲弥 (2002) 「日本語動詞の多義体系 (7)」, 『神奈川大学言語研究』第 25 号, 23-41, 神奈川大学言語研究センター。
- 柴田武編 (1976) 『ことばの意味—辞書に書いてないこと』, 平凡社。

東 信行 (1981) 「語義の比較」, 国広哲弥 (編) 『日英語比較講座 第3巻 意味と語彙』 101-163, 大修館書店。

辞典略号

『岩波』 『岩波国語辞典』 第6版, 岩波書店, 2000。

『明鏡』 『明鏡国語辞典』 初版, 大修館書店, 2002。

『類語』 『類語大辞典』 初版, 講談社, 2002。

Activator *Longman Language Activator*. Longman, 1993.

LDOCE *Longman Dictionary of Contemporary English*. Second Edition, Longman, 1987.